

京都市立明德幼稚園・京都市楽只保育所「優秀園実践提案研究会」

開催レポート

2021年11月27日(土)、2020年度「ソニー幼児教育支援プログラム」優秀園の京都市立明德幼稚園と京都市楽只保育所主催による、「優秀園実践提案研究会」をオンラインウェビナーにて開催しました。公立や私立の幼稚園・保育園・認定こども園、小学校、養成校の学生など、保育や学校教育関係者約281名の参加がありました。

以下に京都市立明德幼稚園と京都市楽只保育所による開催レポートを掲載します。

研究会概要

1. 日時：2021年11月27日(土) 10:00~12:10
2. 主題 京都市立明德幼稚園「思いを寄せる」
～自然とつながる『きっかけ』に着目して～
京都市楽只保育所 楽しさが湧き上がる「保育の土壌」を作りたい
～あるがままの生活に、豊かな体験を～
3. プログラム
 - 1) 開会式 10:00~10:03
 - 2) 実践発表 明德幼稚園 10:03~10:25
 - 3) 実践発表 楽只保育所 10:25~10:45
 - 4) 座談会 10:45~11:05
 - 5) 指導講評 10:05~11:20
 - 6) 記念講演 11:25~12:05
 - 7) 閉会式 12:05~12:10

実践発表 京都市立明德幼稚園

本園は豊かな自然環境にあり、子どもは自然物を身近に感じている。子どもが自然物に興味をもち、不思議さや面白さなどを感じて関わるなかで、その対象物への興味が深まり「思いを寄せて」いく姿がある。思いを寄せていくことによって、よりその対象物を知ろうとする行動が生まれ、その過程での心の動きや思考や探究に『科学する心』の芽生えがあると考えた。また、自然物に思いを寄せていくための“きっかけ”となる要因があると考え、そのことを事例から分析し、明らかにしていった。

論文からは4歳児の事例を中心に発表した。

2020年度は、入園式翌日から新型コロナウイルス感染症による臨時休園となり、6月15日から登園が再開するという異例の新年度のスタートであった。

4歳児のそうすけは、園庭でカエルを見つけて、初めて捕まえることができた。自分のカエルとして親しみ、カエルの足を持ってぶら下げたりいろいろな場所にくっつけたりして遊ぶことを楽しんでいたら、とうとうカエルを死なせてしまった。そのことがきっかけとなり、そうすけの心は揺れ動く。教師はその気持ちに寄り添い、一緒にカエルを埋めた。その後、そうすけは、園にあったカエルの卵が孵り、オタマジャクシ、カエルへとになっていく様子に親しみをもち毎日喜んで見ていた。その大切なカエルを「逃がした方がいい」「カエルは広いほうがいい」と言って逃がすことになる。カエルが好きになり、思いを寄せて関わっていたからこそ、自分が捕まえておきたい気持ちよりカエルの幸せを優先する姿となった。この事例により考察したことを図式化して、そうすけの言動や行動、心の動き、思いを寄せるきっかけとなる要因について分

析した。

論文の4つの事例も同様に分析していった。図式化することで“思いを寄せ”，“深まる”過程やその時々の“きっかけ”となる要因について視覚的に見とり明らかにした。まず、きっかけの土台としては、①“豊かな自然と温かな人間関係”がある。この土台から子どもが自然物に触れ、思いを寄せていくことができるのである。②“自然そのもの”，自然の意外性や生死との出会いなどから心が揺れ動くことで思いを深めていく。③“教師の存在”，教師は子どもの心に寄り添いながら、意図的な環境づくりもする。④“ICTの活用”，コロナ禍で一斉に集うことが難しい中、友達と遊びを共有する，園と家庭をつなぐなどの目的で活用してきた。⑤“友達の存在”，論文の5歳児の事例では、友達とのやりとりの過程で思考が深まる育ちが顕在化している。⑥“家庭との連携”，保護者の共感が、子どもの心を動かすことになる。このように、思いを寄せる“きっかけ”となる要因を分析し、自然物に思いを寄せて、思いが深まる過程で、「科学する心」の育ちにつながる姿が明らかになった。

自然物という何物にもかえがたい教材に恵まれている本園の環境から、より多くの子どもたちに自然に興味・関心を抱いてほしいと考える。そのための環境構成や援助の工夫を課題として考えると共に、ICTのさらなる可能性を追求し、今後の研究につなげていきたい。



実践発表 京都市楽只保育所

子どもたちが『科学する心』を培っていくためには、乳幼児期からしっかりとその芽を耕すことが必要である。大人は、そのために何か特別な準備をするのではなく、ありふれた日常の豊かさを大切にする中で子どもたちの中から『科学する心』が芽生え、育まれていくのではないかと考えている。生活やあそびの中には子どもの心が動いた瞬間がたくさんある。自然の不思議さや美しさを「聴く」「触れる」などして感じたり、目に見えない非認知能力に大人が感動し、子どもと目と目を合わせて共感することで心と心のつながりを感じたりする。これが『科学する心』を育てる基礎となり、「なんだろう」「やってみたい」という好奇心や探求心が尊重され実際に試すことができる環境が『科学する心』につながっていくのだと考える。今回の発表では保育所の園庭で栽培しているスイカを取り巻く子どもたちの姿に保護者を巻き込みながら楽しんだ事例と保育士（大人）が保育の中でやってみたい取組に対する葛藤や迷い、喜びなど良い循環についての事例をあげた。子どもも大人もやってみたいと思う気持ちは同じである。やってみたいと思っても、物的にも人的にも環境が整わなかったり、やってみても大丈夫という安心感が持てないときできなかったりすることはたくさんある。2つの事例は、子ども、大人それぞれの目線でみた内容であった。

また、一人ひとりの子どもの思いや人権を大切にする保育も保育の重点目標として掲げ、日々保育を行っている。様々な理由で保育が必要な子どもたちや支援、見守りの必要な子どもたちもいる。今回の発表では医療的ケアの必要な子どもが友だちや大人との関りの中で育つ姿や保育で大切にしていることを動画も交えながら報告した。気軽に保育を語る場として、「保育を語ろう会」を定期的実施している。昼休憩などの時間を利用し、子どもの可愛い姿や保育で楽しかった出来事などその時に感じたことを語り合う。その中で、保育の悩みを話したり、子どもの姿から見えてくるものは何か深い話もできたりする。保育士の心が動くことは子どもにも響き、相互に影響し合うものでもある。皆で語り合うことの大切さもこの語ろう会を通して実感できたことである。

乳児期から幼児期，学童期，そして大人へと続いていくが，保育所で経験したことが今後の子どもたちの生きる力へとつながっていくことを願い保育を進めている。

座談会 京都市立明德幼稚園 教員 と 京都市楽只保育所 保育士

今回2園の合同研究会ということで、語らいの場を設定した。楽只保育所には“語ろう会”という場があり、この場でも2園が語らう雰囲気を与えたいという思いから座談会を組み込んだ。2園では、これまで学びを深め合いたいという思いで、互いの園を見学し、話し合う場をもつことで情報交換などを行ってきた。座談会では論文を発表するにあたっての率直な思いや意見、各園での苦労した点などを報告し合った。

明德幼稚園では、実践することは楽しいが、それを「科学する心」の芽生えにつなげていくのが大変であった。話し合いを積み重ねることで「きっかけ」というキーワードに出会い、まとめていくことに苦しさと共に楽しさも見い出せるようになった。

楽只保育所では、保育を“語ろう会”の回数を重ねるたびに意見がたくさん出るのは良いことでもあるが、それをまとめていくことの難しさを感じた。綺麗にまとめるのではなく、意見を出し合えることが大切であることを感じた。

両園の事例からは、ともに楽しく実践していることが読み取れるが、その中で、ありのままの子どもの姿を受け止める保育士、教員の関わり、温かく見守る姿勢が大切であることや、大人主導ではなく、子どもの心を理解し、真剣に向き合う姿勢が大切であることなどを再確認できた。子どもが目の前にあることをどんなふうと感じ、思っているのかを探りたい思いを大人が強くもっている。今の子どもたちの心に響くものはなんだろうか、大人も探求心をもつことは大切である。保育計画は立てるが、日々の活動の中で子どもが発見したことに向き合っていくことで方向性を考えていくような柔軟さが必要であることも互いに確認ができた。また、見学交流をして、互いに参考になり刺激を受け合った。明德幼稚園では、楽只保育所の木材を利用した環境に刺激を受け、友達や異年齢の新たなつながりが生まれたらという願いから、園内環境を見直し環境設定をした。その結果、子どもたちはその場でごっこ遊びなどを展開し、友達とつながりをもちながら遊びが広がったという実践を報告した。

論文の取組をする中で、大変だったことを本音で語りながら、それでも取組んだことで共有できたところも多々あり、やりがいを感じることでできた話や、“寄り添う力”というものは、できるようで難しい、でもそこに保育士の力が試されるのではないかといった深い内容も話すことができた。同じ思いをもちながら子どもたちと関わっている幼稚園と保育所と一緒に発表をする機会をもてたことは互いに良い刺激となり、これからの京都の保育や保幼連携をどう考えていくかということにつながっていくのではないかと考える。

指導講評 「研究でつながる2園」

古賀 松香 氏 / 京都教育大学 教授

「研究でつながる2園」という演題で、京都教育大学教授 古賀松香氏に指導講評をいただいた。2園はともに京都市の公立園である。2園の論文には共通点がある。まず1点目は、子どもの環境との出会いを豊かにしたい、出会いの次には面白さや「もっと」につながっていくようにしたいという保育者の思いがあることである。そこには保育の知恵と保育者の専門性によるはたらきかけがある。

2点目は、保護者・地域と共に歩む保育を推進していることである。子どもの心の揺れ動きを繊細に感じ取る保育者は、保護者の心の揺れ動きも繊細に感じ取る。そのことが保護者との関係形成につながっている。保育の専門家とその子どもの専門家が理解し合うことは、子どもの生きる世界を幸せにするのである。

3点目は、子どもが「やっちゃった」こともたいせつに感じられる、つまり、起こってしまったことに焦点を当てるのではなく、そうしたいと思った子どもの気持ちに焦点を当てる明確さがあるところである。子どもにはこの世界がどう見えているのか、どうかかわりたいと思っているのか、驚くようなことが起こるたびに、子どもから見た世界に思いを馳せ、想像しながら「思いを寄せる」保育を展開していることである。

論文から見出せる両園の共通点という視点から講評をいただいた。

記念講演 「子どもと環境の力を引き出す保育」

古賀 松香 氏 / 京都教育大学 教授

指導講評に続き、京都教育大学教授 古賀松香氏に「子どもと環境の力を引き出す保育」という演題でご講演いただいた。以下に講演内容を5つの項目によりまとめる。

・自然の豊かさ+園庭づくり…思いを寄せるにはプロセスがある。思いを寄せる子どもに思いを寄せる保育者がいることで、子どもの世界を受け止め、肯定的な価値づけをする。科学的な正しさに近づこうとするのではなく、その生きもの世界に近づこうとすることで、『科学する心』が芽生える。

命を終えていくものが命を育む庭、地域の豊かな自然は望んでそこにあるものではなく、資源として文化としてあるものである。隠れる場所を作ることによって園庭に静と動ができる。ただそこにあるだけでは子どもにとっての豊かな環境にはならない。子どもが会うこと、たくさん触れること、触れることで好きになること、好きになることでわかっていくことに価値づける保育が、『科学する心』を育む。園庭は子どもと大人の実験室である。

・挑戦する保育者たち…大人の挑戦を保育の土壌に挙げたのは画期的である。共に考え、保育の願いを共有し、保育者の思いを受け止め合うチーム保育の良さがある。ICTと自然の間をつなぐ挑戦もあった。保育室のパソコンで子どもと共にオクラをタイムラプス動画で撮影し、YouTube 配信で家庭とつながり保護者も思いを寄せていくことで、子どもと生長を楽しみにしていた。

何が正解かわからないコロナ禍で、是非とも実現させたい保育とは何かが問われている。保育とは、明日がまたやってくる継続の中の京を作る営みである。今日の子どものズレは明日の糧になる。子どもの姿に基づいて丁寧に考え、挑戦する勇気を持ち、支え合う仲間を大切にすることに価値がある。新たな保育が生まれる可能性はここにこそある。

・楽しみ合うことで支え合う…保育も育児もハプニングを楽しむもの。大人の思うようにいかないところが子どものすばらしさ、それは子どもが自分で考えて感じて行動している証拠である。こちらの予測を超えてくると、そこにどんな思いがあったのか、思いを寄せる大人がいることでハプニングを楽しみ、子どもの世界を楽しむことにつながる。保育の中で起こったハプニングの発信は、保護者を含む大人の心も揺さぶる。肯定的に楽しむパワーは広がりをもって子どもの生きる世界を支えていく。

・共育仲間としての大人たち…保育者が、子どもが感じる感覚を大切に見つめ、言葉以前の感覚を通わせ関係をつくっていく。2園では、このプロセスに自然の力が大きく働いている。そこに子どもが育つ基盤となる経験を楽しみながら記録する研究がある。保育者は共に楽しみ支え合う仲間である。支え合い、考え合い、悩み、受け止め、さらに高め合う保育者共同体はすべての保育者にとって意味をもつ。

大変だけど面白い乳幼児期を、いかに楽しめるようにするかはそこで会う大人たちの関係にも依存している。保護者と保育者が良さを伝え合える仲間になり、子どもを真ん中に語り合えることが宝となる。

・共創の保育へ…共に創る保育協働の時代へ 2園は、子どもの姿を出発点とする・こどもの様々な思いを受け止める・継続して関わる中での発見を大切にする・大人の挑戦を大切にするという共通理念で共創保育モデルを作る希望を感じる。『科学する心』の研究を見合い、それぞれの園が何に価値を置き工夫を生み出しているのか知り合う中で、共通点を見出し細かな方法の違いに学ぶ。科学することの研究をする中で、子どもを希望とし、つながる保育文化がある。大人も共に思いを深め、楽しんでいくことが、子どもの世界を深め、更に関わり続ける明日の保育を創る。